

指導計画の考え方

幼稚園教育は、幼児が自ら意欲をもって環境と関わることでつくり出される具体的な活動を通して、その目標の達成を図るものである。

幼稚園においてはこのことを踏まえ、幼児の発達に即して一人一人の幼児にとって、幼児期にふさわしい生活が展開され、適切な指導が行われるよう、各園の教育課程に基づき、調和のとれた組織的、発展的な指導計画を作成し、幼児の活動に沿った柔軟な指導を行わなければならない。指導計画は、幼児の発達に即して一人一人の幼児が幼児期にふさわしい生活を展開し、必要な体験を得られるようにするために具体的に作成するものであり、作成に当たっては、次の3点に留意する。

- 1 具体的なねらい及び内容は、幼稚園生活における幼児の発達の過程を見通し、幼児の生活の連続性、季節の変化等を考慮して、幼児の興味や関心、発達の実情等に応じて設定すること
- 2 環境は、具体的なねらいを達成するために適切なものとなるように構成し、幼児が自らその環境に関わることにより様々な活動を展開しつつ必要な体験を得られるようにすること。その際、幼児の生活する姿や発想を大切にし、常にその環境が適切なものとなるようにすること
- 3 幼児の行う具体的な活動は、生活の流れの中で様々に変化するものであることに留意し、幼児が望ましい方向に向かって自ら活動を展開していくことができるよう必要な援助をすること

日々の保育の営みの中で、幼児がどのように変容しているかを捉えながら、そのような姿が生み出された様々な状況について、適切かどうかを検討して、保育をよりよいものに改善するための手掛かりを求めることが評価である。評価に基づいた新たな指導計画の作成といったサイクル（P D C Aサイクル）を確立し、機能させることが大切である。よりよい教育活動を展開するために、指導計画に基づいた実践を通して、常に評価を行い、改善を図ることが必要である。

長期の計画・短期の計画

指導計画は、年、学期、月等の比較的長期間を見通した計画（長期の指導計画）と、週や一日等比較的短期間の具体的な幼児の生活に即した計画（短期の指導計画）の二つに大別することができる。

長期の指導計画は、幼稚園生活の全体を視野に入れ幼児の生活を長期的に見通しながら、具体的な指導の内容や方法の設定、環境の構成を踏まえて全教職員協力の下に作成する。

短期の指導計画では、長期の指導計画の基本的な考え方に基づいて、週の計画（週案）や一日の計画（日案）を作成する。短期の指導計画は、「今週は何をするか」「明日、何をするか」ではなく、「幼児はどのように成長してきているか」「幼児の興味、欲求は何か」等、幼児一人一人の実態を的確に把握することを大切に作成する。

週案や日案は、週・日等の生活の区切りを単位とした具体的な指導案であり、学級の実情や幼児一人一人の生活する姿を捉えながら、どのように保育を展開すればよいかについて具体的に予想して立てるものである。実際には、幼児の生活の自然な流れや生活のリズム、環境の構成をはじめとする教師の援助の具体的なイメージ、生活の流れに応じた柔軟な対応等を計画することになる。その際、特に生活のリズムについては、幼児の興味や欲求に応じて活動と休息、日常性と変化、個人と集団等について考えていくことが必要である。

指導案作成上の留意点

幼稚園教育は環境を通して行うことが基本であり、その環境をつくり出すのは教師である。どのような環境をつくり出し、どのような援助を行うかを具体的に示したものが指導案である。

指導案を作成する際には、次の点に留意しなければならない。

- 1 幼児の発達を的確に捉える。
- 2 具体的な「ねらい」と「内容」を明確に設定する。
- 3 適切な環境を構成する。
- 4 環境に関わって活動する幼児の姿と教師の援助を予想する。
- 5 実践し評価する。

指導案の形式

指導案の形式や作成の手順に一定のものはない。幼児の生活に応じた保育を展開するためのよりどころとなるように、それぞれの幼稚園で工夫してつくり出すことが求められている。

資料⑭⑮⑯ P169・170・171

幼児理解に基づいた評価

指導の過程で、幼児のよさや可能性等を把握し指導の改善に生かすために、幼児一人一人の発達の理解に基づいた評価が必要である。

評価の実施に当たっては、指導の過程を振り返りながら、幼児がどのような姿を見せていたか、どのように変容しているか、そのような姿が生み出されてきた状況はどのようなものであったかといった点から幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性、特徴的な姿や伸びつつあるもの等を把握するとともに、教師の関わりや環境の構成が適切であったかどうかを検証し、指導の改善に生かすようにすることが大切である。

また、幼児理解に基づいた評価を行う際には、他の幼児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定によって捉えるものではないことに留意する必要がある。

なお、幼児一人一人のよさや可能性等を把握していく際には、他の教師との話し合い等を通して、教師は自分自身の幼児に対する見方の特徴や傾向を自覚し、幼児の理解を深めていかななくてはならない。

評価の妥当性や信頼性が高められるよう創意工夫を行い、組織的かつ計画的な取組を推進するとともに、次年度又は小学校等にその内容が適切に引き継がれるようにすることが大切である。